

年寄りにはちっぽけなるのかもしれない。わたしも若い頃は週刊誌を毎週5、6誌は買っていた。読むとはなく読んで、読み飛ばすのである。いまは新聞の見出しや電車の中づりで内容がだいたいわかる。読むとすれば、月に1度、定期健診で訪れる病院の待合室である。

病院は平気で人を待たせる。3、4時間はさらに待たせる。映画や演劇で客を30分か1時間待たせれば、客は怒って帰って

しまう。病院だけは別世界なのである。それだけ丁寧に診察している証とも言える。そこで週刊誌の束を読む。だいたい、テレビのワイドショーで知っていることばかりである。

「大丈夫ですね」といわれると、ほっとして食欲がでる。家内と2人で、スーパーへ寄って夕食のおかずを買い求めて帰宅する。ほとんど外食はしなくなつた。食べ歩くのが面倒くさくなつた。わざわざ店屋まで

電話を切っている。テレビで、亡くなつた人に友人がコメントをしている。「こんなことなら、あの時合つていればよかつた」わたしは生まれ故郷松浦に帰る時だけがそわそわとしてい

のかもしれない。「風の便り」という言葉がある。わたしにもいまの星鹿半島の風景を風が便りをしてくれる。そして、人の便りもしてくる。「どこの家のだれだれさんが死なした」「どこの家に子供が誕生した」。亡くなつた人はよく知っている人であつたりする。同じ時代の同じ風景を駆け巡つた人である。誕生した人は知らない。こうやって、故郷は遠くなる。

# 故郷は遠くになる

としますよ」が看護師の口癖である。どんなかわいい看護師でも、ちくつとするのは嫌だ。尿を取つたりもする。これも、看護師が笑いながら「少量でいいですから」という。「わかつている。年寄り扱いするな」である。それから、また待たされる。やっと主治医の診察となつて

うよりは、家でカップ麺を食べる方がいい。なにかもが面倒くさくなる。そのうち、生きているのも面倒くさくなるのかもしれない。それはわたしばかりかというところでもないらしい。電話で友人と「会おうよ」と約束しようとするが「ま、そのうちに」で

帰れるからである。博多から、伊万里を過ぎて松浦市の今福へ入ると星鹿半島・城山を望むことができる。晴れた日の夕暮れ、夕日の星鹿半島の風景はわたしの原風景である。人は、死んだら魂となつて生まれ故郷に帰るそうである。城山に吹いている風は魂の風な

わたしは松浦市内の小学校の民話ミュージカルで年に数回は故郷へ帰ることができた。そのミュージカルもなくなるそうである。人は、誇つていいものからなくしていく。また、故郷が遠くになった。(松浦市出身)